2024 年 12 月 12 日（木）

平城第 660 次調査　記者発表資料

西大寺金堂院の発掘調査

独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
都城発掘調査部（平城地区）

調 査 地：奈良市西大寺小坊町
調査期間：2024 年 3 月 14 日（木）～6 月 20 日（木）
調査面積：約 490 ㎡（西調査区 293 ㎡、東調査区 197 ㎡）

調査終了後のため、現地公開はありません。

概 要

今回の調査では、西大寺金堂院の中軸線上でロ字状とみられる磚列と土坑を検出しました。磚列は灯籠の区画、土坑は灯籠の痕跡と考えられます。西大寺で灯籠の痕跡が発見されるのは初めての成果です。

また、西大寺金堂院の西面回廊とその東西両雨落溝を検出し、西面回廊の規模と構造を確定しました。さらに、西面回廊では礎石据付穴に伴う壺地業を検出し、内庭部では砂や礫による舗装を確認しました。

１．調査の経緯と目的（図１、２）

これまでの調査成果

西大寺は天平神護元年（765）に称徳天皇によって平城京右京の地に造立された、天皇勅願の寺院です。金堂院は仏像が安置された金堂を中心に回廊で区画した範囲であり、奈良時代の西大寺の中枢部分にあたります。宝亀 11 年（780）には『西大寺資財流記帳』が作成され、この頃までには寺院全体が完成したとみられます。この資財帳によると、西大寺には単層の薬師金堂と重層の弥勒金堂、２つの金堂があったことがわかります。

金堂院についてはこれまでの発掘調査で次第に実態がわかってきました。2006・2007 年に中心建物である薬師金堂の発掘調査をおこない、薬師金堂の礎石据付穴を確認しました（平城第 409・422 次調査）。2013 年には今回の調査区の南側で、西面回廊と薬師金堂から西にのびる軒廊との接続部分を確認しました（平城第 505 次調査）。また同年、西大寺金堂院の東面回廊を確認し、金堂院の東西規模が判明しました（平城第 521 次調査）。2023 年にはこれらより北方で、初めて弥勒金堂の抜取穴と壺地業を確認しました（平城第 655 次調査）。これらの発掘調査成果と『西大寺資財流記帳』の記述を合わせた、西大寺金堂院の規模と構造の復元検討が進んでいます。

調査の目的と概要

本調査は、奈良市西大寺小坊町の駐車場造成に先立ち実施した発掘調査です。工事に伴う掘削が行われる範囲のうち、掘削深度が遺構面に達することが想定される範囲を中心に東西２箇所の調査区を設定しました。西調査区は、西大寺金堂院西面回廊の想定位置にあたり、西面回廊の位置と構造をあきらかにすることを目的としました。東調査区は西大寺金堂院内庭部の中軸付近の遺構の有無を確認することを目的としました。

調査は 2024 年 3 月 14 日に開始し、6 月 20 日に終了しました。

２．主な検出遺構

西調査区と東調査区に分けて説明します。

西調査区の遺構（図３）

金堂院西面回廊

調査区西部で金堂院西面回廊の一部を検出しました。基壇、礎石据付穴 18 基とその中に据えられた根石、雨落溝を検出しました。

柱位置　礎石据付穴を 18 基検出し、桁行 5 間分を確認しました。梁行 2 間の複廊で、柱間寸法は、桁行、梁行ともに約 3.6m（12 尺）等間です。規模と構造ともに、既往の調査で判明している東面回廊の成果と整合します。

礎石は残っていませんでしたが、礎石据付穴 16 基には礎石を支えるための根石が残っていました。根石はそれぞれの礎石据付穴に数石ずつ据えられており、大きさは 20～80 ㎝です。石材は安山岩、花崗岩、流紋岩、チャート等を用いています。

礎石据付穴の規模は穴ごとに異なります。棟通りの**ほ２**の礎石据付穴の規模は南北約 0.9m、東西約 1.1m、深さ約 0.2m です。棟通りの**い２**の礎石据付穴の規模は、南北約 1.5m、東西約 1.5m、深さ約 0.7m で**ほ２**に比べて深さがあります。**い２**の礎石据付穴の掘方内には底面付近まで 20～40 ㎝大の安山岩や花崗岩がありました。礎石据付穴の掘削にともなって地盤の改良を目的とした壺地業を部分的におこなっている可能性があります。

基壇　東西の幅は約 11m（37 尺）で、南北約 15m分を検出しました。創建当時には、基壇外装を備えていたと考えられますが、今回の調査では基壇外装自体やその抜取痕跡は確認できませんでした。

雨落溝　基壇の西辺と東辺で、南北方向の雨落溝を検出しました。西雨落溝の幅は約 0.8m、深さ約 0.2m、東雨落溝の幅は約 1.2m、深さ約 0.1mです。東雨落溝の底面には凝灰岩の屑が南北に点在していました。東雨落溝の側石、底石の痕跡とみられます。

内庭部

西面回廊の内側で、厚さ 5 ～10 ㎝の砂層を検出しました。東雨落溝と重複して、それより古く、廃絶後の瓦だまりに覆われています。西大寺金堂院の内庭部は、当時この砂で舗装されていた可能性があります。

その他の遺構

石敷　調査区の南で、基壇を東西に横断する東西方向の石敷を１条検出しました。南北幅が約 1.2ｍで、東西約 11.8ｍ分を確認しました。西雨落溝の中心位置から東雨落溝の中心位置の間に構築されています。15～25 ㎝大の扁平な石が、上面の高さを揃えるように配置されています。石敷は回廊の基壇土に覆われており、明確な掘方はありません。石の隙間には粗砂が堆積しており、一時期流水があったとみられます。西が高く、東が低い構造で、流水は内庭部側に流れたと考えられます。石敷は、回廊が機能した時期より前のものである可能性がありますが、性格は未詳です。

東西溝　調査区東南で石敷の東端から東にのびる、幅約 1.6ｍ、深さ約 0.3ｍの素掘りの溝を検出しました。西調査区の内庭部を東西に横断し、調査区東外へ続きます。埋土には瓦片や粗砂・礫を含みます。また、粗砂が入ることから流水があったと考えられます。東西溝は金堂院内庭部の砂層に覆われるため、金堂院の完成後には機能を停止していたと考えられます。

瓦だまり　調査区の東部、西面回廊の東側基壇東縁から内庭部へ広がります。瓦は、炭と焼土が混ざる土に含まれており、西面回廊の廃絶後に堆積したと判断できます。

東調査区の遺構（図４）

磚列と土坑

調査区西南部で、南北に並ぶ磚３点（痕跡を含むと６点分、西側磚列）とそれに接続するとみられる東西に並ぶ磚３点（痕跡を含むと４点分、南側磚列）を検出しました。これらはいずれも上面が水平に据えられており、本来はロ字状に接続すると考えられます。東側には磚は残りませんが、抜取痕跡のみを検出しました。北側の磚列は後述する土坑２によって壊され、残っていません。西側磚列の西縁から東側磚列の抜取痕跡の東縁までの幅は約 2.3ｍです。西側磚列の東側に、東西約 1.8m、南北約 2.5ｍ以上、深さ約 0.8ｍの土坑を検出しました。土坑はこれまでの調査成果によって想定される西大寺金堂院の中軸線上に位置します。この北側に弥勒金堂が立つことから、この土坑は灯籠の痕跡で、磚列は灯籠の区画と考えられます。

内庭部

内庭部の砂層の上と下で２層の礫敷を確認しました。内庭部の一部は、当時この礫敷で舗装されていた可能性があります。

その他の遺構

土坑１　調査区西南で回廊廃絶後の堆積とみられる焼土層を掘り込む土坑を検出しました。南北６ｍ以上、東西４ｍ以上、深さ約 0.5ｍ。多量の瓦片や鬼瓦、磚、奈良三彩の破片、瓦器椀を含みます。

土坑２　土坑１の東側で上層礫敷を掘り込む土坑を検出しました。磚で囲われた土坑と重

複し、これより新しいものです。南北約４ｍ、東西約 3m、深さ約 0.2m。多量の瓦片や奈良三彩の破片を含みます。

３．主な出土遺物

今回の調査では、奈良時代の土器類・瓦磚類などが出土しました。土器類は、土師器・須恵器・奈良三彩の破片などを含みます。また、瓦磚類では三彩瓦片、軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、磚などを含み平瓦・丸瓦が多量に出土しました。

４．まとめ

（１）西大寺金堂院の中軸線上で、灯籠の痕跡とみられる土坑を検出しました。

西大寺金堂院の中軸線上にロ字状に配置されたと推定できる磚列を検出しました。磚の内側に東西約 1.8m、南北約 2.5ｍ以上、深さ約 0.8ｍの土坑を検出しました。金堂院の中軸線上に位置する遺構としては灯籠があります。飛鳥の山田寺では８世紀には存在したとみられる灯籠が、金堂の前面かつ寺院の中軸線上で見つかっており、八角形の灯籠の台座を玉石積みでロ字状に囲う様子がわかっています（参考）。本調査で見つかった土坑は灯籠の痕跡、磚列は灯籠の台座を囲う区画として設置されたものと考えられます。

（２）西大寺金堂院西面回廊を確認し、基壇と建物の規模と構造を確定しました。

西面回廊は梁行２間の複廊で、南北５間分を検出しました。基壇の規模は幅約 11ｍ（37 尺）です。回廊の規模は桁行、梁行ともに約 3.6ｍ(12 尺)等間であることがわかりました。これはこれまでの成果から想定される位置、規模と整合します。

（３）西大寺金堂院造営の様相の一端をあきらかにしました。

西面回廊の礎石据付穴は、場所によって深さが異なることを確認しました。同じ建物の一部ですが、南では礎石据付穴の掘方が深く、軟弱な地盤に対し壺地業をおこなった可能性があります。

さらに西大寺金堂院の内庭部では砂層を検出し、中軸線上付近では礫層を検出しました。これらはいずれも廃棄後の焼土層に覆われることから、当時の内庭部の舗装の様相を示していると考えられます。

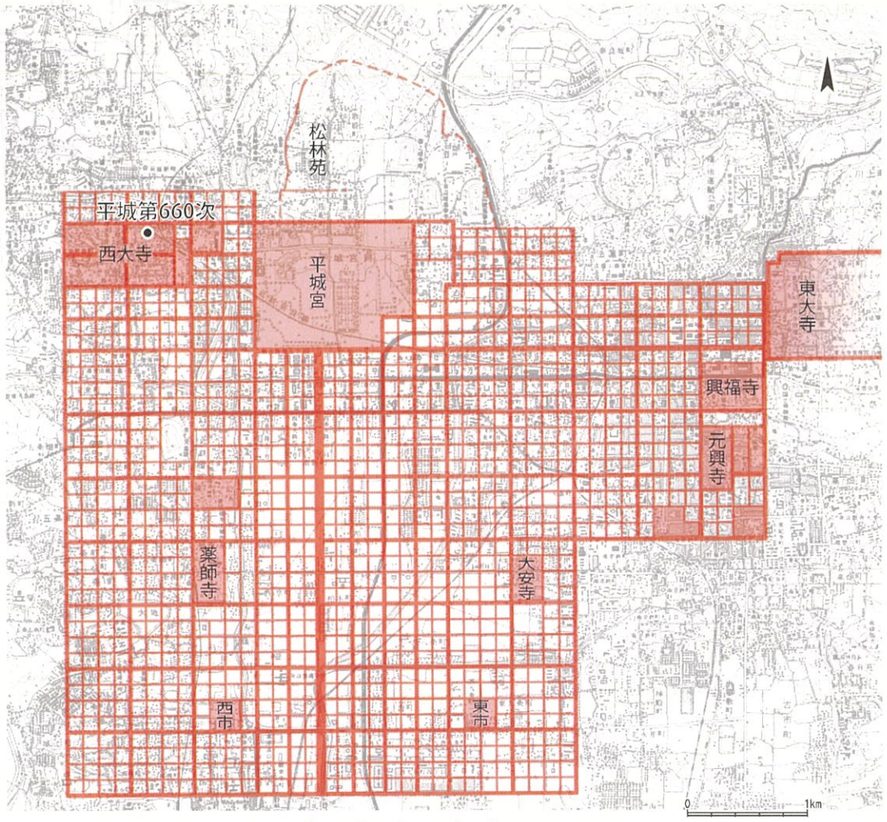


図１　第660次調査　調査区位置図　1:50000

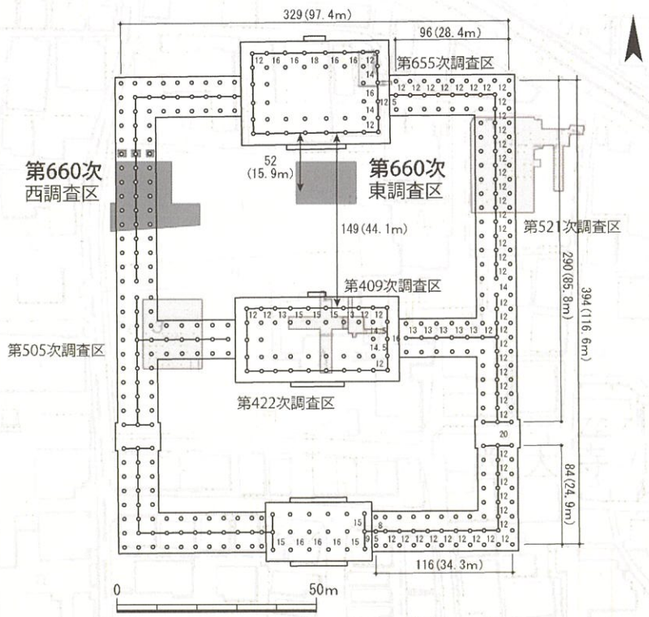


図２　第660次調査　調査区周辺図　1:1500

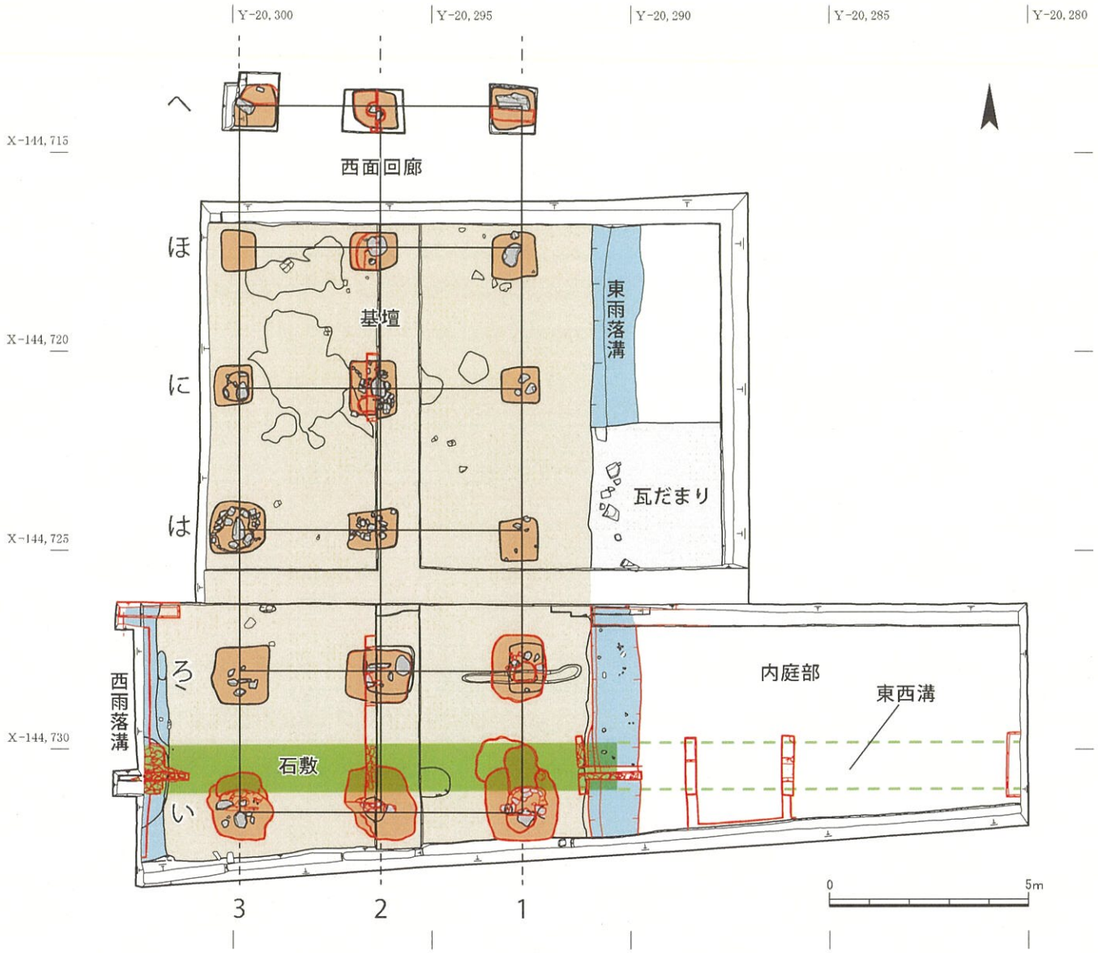
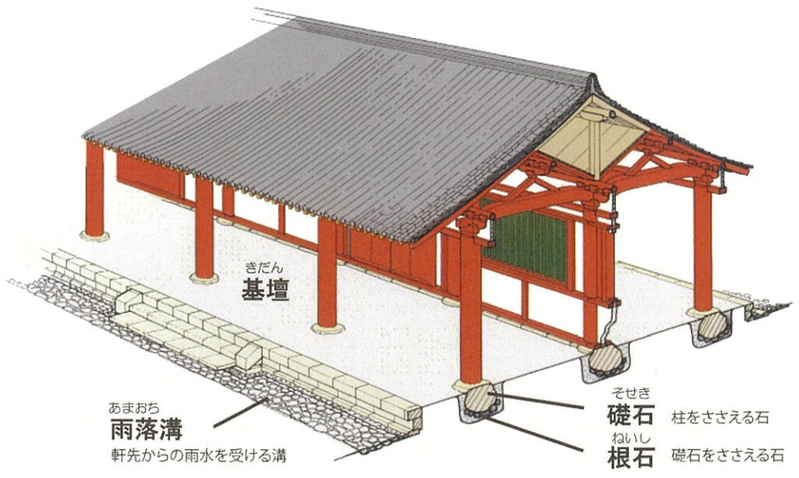


図３　第660次調査　西調査区平面図　1:150



【参考】　回廊（複廊）のイメージ図

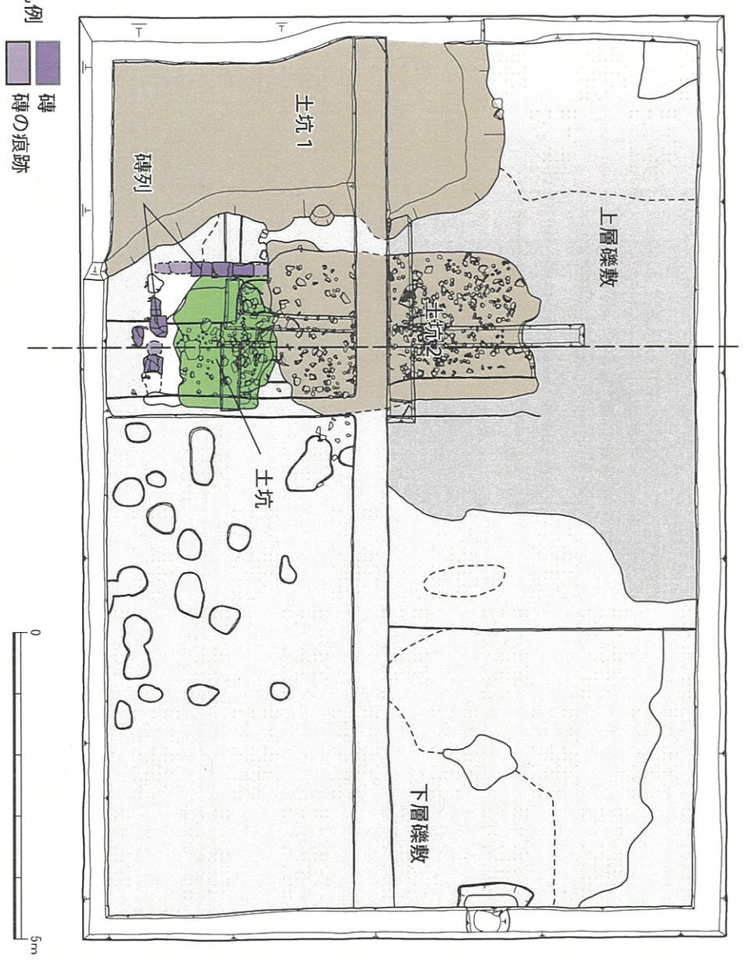
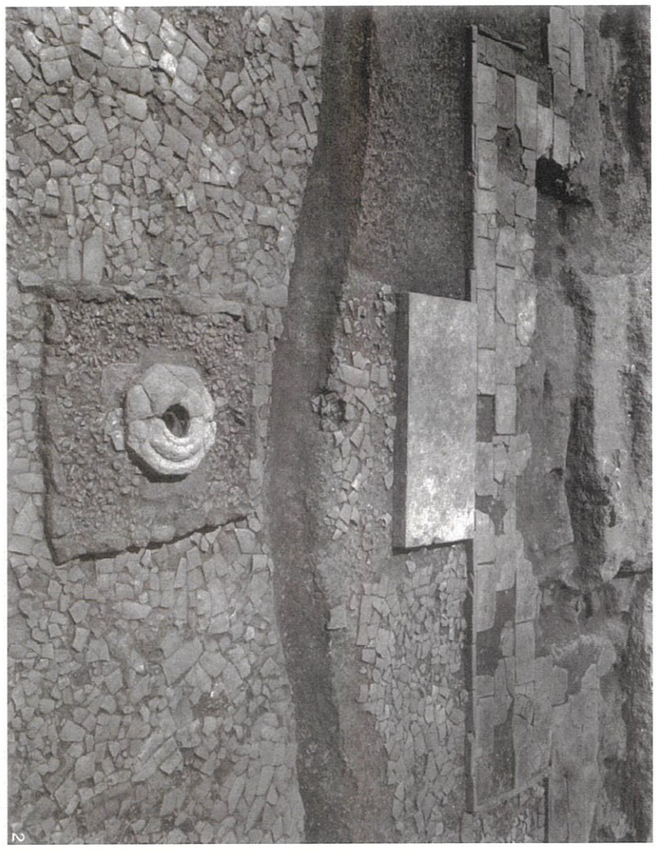


図4　第660次調査　東調査区平面図　1:100



【参考】　山田寺灯籠跡　（奈文研 2002『山田寺発掘調査報告』より）

【参考】　古代寺院における灯籠遺構例　（奈文研 2001『西隆寺発掘調査報告書』より）

	灯籠基壇 / 基壇据付穴	時期	遺構の規模・形状など	伽藍における位置	金堂基壇規模	金堂基壇縁～灯籠心	金堂南面階段縁～灯籠心	基準尺
飛鳥寺	有 / 有	創建時（594年頃）？	方4尺の台座残存．中央に径1.6尺、深さ8寸の穴あり	中金堂・塔を通る中軸線上、中金堂と塔の間	東西70尺（21.2m）×南北58尺（17.6m）	6.7m（21.95尺）	5.3m（17.65尺）	0.303m（実測尺）
山田寺	有 / 有	8世紀には存在	径60cm、高さ15cmの凝灰岩製八角形台座と台石残存．台座の中央に径25cm、基壇に径15cm、深さ18cmの穴あり	金堂・塔・中門・講堂通る中軸線上、金堂と塔の間	東西65尺（21.6m）×南北55尺（18.2m）	7.2m（21.6尺）	5.6m（16.8尺）	0.333m
奥山久米寺	無 / 有	創建時（7世紀後半）？廃絶は10世紀	1.5m四方の穴で地表下85cmに榛原石の板石が据わり柱状のものの抜取り痕あり	金堂・塔を通る中軸線上、金堂と塔の間	東西80尺（23.4m）×南北18m前後	7.2m（24.6尺）	6.05m（20.68尺）	0.2925m
来美廃寺（出雲）	無 / 有	創建時（7世紀末～8世紀初頭）？	東西1.2m×南北1.0mの灯籠基壇抜取穴のみ	金堂中軸線上、金堂南	東西40尺（12.0m）×南北36尺（10.8m）	5.1m（17.0尺）	3.0m（10.0尺）	0.300m？
薬師寺（平城）	無 / 有	創建時（奈良時代初頭）？	東西1.7m以上×南北2.1m方形の基壇抜取穴のみ（奈良時代瓦片が混入）	金堂・中門を通る中軸線と東西塔を通る中軸線の交点	東西99.3尺（29.4m）×南北61.7尺（18.3m）	19.5m（65.9尺）	17.5m（59.1尺）	0.296m
興福寺	有 / 有	創建時（720年頃）？平安時代に据え直し	径約1.4mの花崗岩製六角形台座が残存．中央に径36cm、深さ50cmの穴あり	中金堂・中門を通る中軸線上、中金堂と中門の間	東西135.05尺（40.9m）×南北89.8尺（27.2m）（大岡実氏による現状実測）	8.3m（28.1尺）	5.2m（17.6尺）	0.295m？
播磨国分寺	無 / 有	創建時（8世紀中葉？）	直径2.4mの円形基壇．外装瓦敷き、掘込地業、径40cm、深さ1.2mの竿抜取穴あり	金堂・中門を結ぶ中軸線上、金堂と中門の間	東西123尺（36.9m）×南北78尺（23.4m）	6m（20.0尺）	4.65m（15.5尺）	0.300m？
西隆寺	無 / 有	創建時？（1回は据え直しあり）	東西2.2m×南北2.5mの灯籠基壇据付・抜取穴のみ	金堂・中門を通る中軸線から東へ1尺、金堂と中門の間	東西129尺（38.2m）×南北79尺（23.4m）	8.4m（28.4尺）	6.5m（22.0尺）	0.296m
東大寺大仏殿	有 / 有	本体は天平勝宝4年（752年頃）基壇は鎌倉時代以前の再設置	基壇に版築	大仏殿・中門を結ぶ中軸線上、大仏殿南	東西97.1m（327尺）×南北61.2m（206尺）	24.6m（82.8尺）	21.7m（73.1尺）	0.297m？（天平尺=曲尺×0.98）
当麻寺	有 / 有	創建時？（白鳳時代か．天平時代は下らない？）	基壇は近年整備．基礎も近年モルタルで補修．竿・中台・笠・宝珠（いずれも凝灰岩製）は当初	金堂・講堂を結ぶ南北中軸線上	東西16.4m×南北13.5m	9.4m（？）	7.3m（？）	？